

Oracle® Database

Client クイック・インストール・ガイド

10g リリース 2 (10.2) for Solaris Operating System (SPARC 64-bit)

部品番号 : B25028-03

原典情報 : B15693-02 Oracle Database Client Quick Installation Guide 10g Release 2 (10.2) for Solaris Operating System (SPARC 64-Bit)

2006 年 3 月

このマニュアルでは、Solaris Operating System (SPARC 64-bit) に Oracle Database Client をすばやくインストールする方法を説明します。次の内容について説明します。

1. このマニュアルの概要
2. root としてのシステムへのログイン
3. ハードウェア要件の確認
4. ソフトウェア要件の確認
5. 必須のオペレーティング・システム・グループおよびユーザーの作成
6. Oracle ベース・ディレクトリの作成
7. oracle ユーザーの環境の構成
8. 製品ディスクのマウント
9. Oracle Database Client のインストール
10. インストール後の作業
11. 追加情報
12. ドキュメントのアクセシビリティについて
13. サポートおよびサービス

1 このマニュアルの概要

注意： このマニュアルでは、Oracle ソフトウェアがインストールされていないシステムに Oracle Client をインストールする方法を説明します。このシステムに既存の Oracle ソフトウェア・インストールが存在する場合、詳細なインストール方法については『Oracle Database Client インストール・ガイド for Solaris Operating System (SPARC 64-bit)』を参照してください。

このマニュアルでは、Oracle ソフトウェアがインストールされていないシステムに Oracle Database Client をデフォルトでインストールする方法を説明します。次のインストール・タイプのインストール方法を説明します。

- **Instant Client:** Oracle Call Interface (OCI)、Oracle C++ Call Interface (OCCI)、Pro*C または Java データベース接続 (JDBC) OCI アプリケーションに必要な共有ライブラリのみがインストールできます。このインストール・タイプは、他の Oracle Database Client のインストール・タイプに比べ、非常に少ないディスク領域で済みます。
- **管理者:** アプリケーションを、ローカル・システムまたはリモート・システムの Oracle Database インスタンスに接続できます。また、Oracle Database を管理するためのツールが提供されます。
- **ランタイム:** アプリケーションを、ローカル・システムまたはリモート・システムの Oracle Database に接続できます。

ヒント： Instant Client 機能の詳細は、『Oracle Call Interface プログラマーズ・ガイド』を参照してください。

このマニュアルでは、「カスタム」インストール・タイプについては説明しません。

追加インストール情報の入手先

Oracle Database Client のインストールの詳細は、『Oracle Database Client インストール・ガイド for Solaris Operating System (SPARC 64-bit)』を参照してください。

このマニュアルは、製品ディスクに含まれています。アクセスするには、Web ブラウザで、インストール媒体のトップレベル・ディレクトリ内にある welcome.htm ファイルを開き、次に「ドキュメント」タブを開きます。

2 root としてのシステムへのログイン

Oracle Database をインストールする前に、root ユーザーとしていくつかのタスクを実行する必要があります。root ユーザーとしてログインするには、次の手順の 1 つを実行します。

注意： ソフトウェアは、X Window System ワークステーション、X 端末、または X サーバー・ソフトウェアがインストールされている PC またはその他のシステムからインストールする必要があります。

- ソフトウェアを X Window System ワークステーションまたは X 端末からインストールする場合、次の手順を実行します。

1. X 端末 (xterm) など、ローカル・ターミナル・セッションを開始します。
2. ソフトウェアをローカル・システム以外にインストールする場合、リモート・ホストの X アプリケーションをローカル X サーバーに表示できるように、次のコマンドを入力します。

```
$ xhost fully_qualified_remote_host_name
```

例：

```
$ xhost somehost.us.acme.com
```

3. ソフトウェアをローカル・システム以外にインストールする場合、ssh、rlogin または telnet コマンドを次のように使用して、ソフトウェアをインストールするシステムに接続します。

```
$ telnet fully_qualified_remote_host_name
```

4. root ユーザーとしてログインしていない場合は、次のコマンドを入力して、ユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
password:
#
```

- X サーバー・ソフトウェアがインストールされた PC または他のシステムからソフトウェアをインストールする手順は、次のとおりです。

注意： このタスクの実行方法の詳細は、必要に応じてご使用の X サーバーのドキュメントを参照してください。使用している X サーバー・ソフトウェアによっては、タスクの実行順序が異なる場合があります。

1. X サーバー・ソフトウェアを起動します。
2. X サーバー・ソフトウェアのセキュリティ設定を構成して、リモート・ホストの X アプリケーションをローカル・システム上で表示できるようにします。
3. ソフトウェアをインストールするリモート・システムに接続し、そのシステムで X 端末 (xterm) などのターミナル・セッションを開始します。
4. リモート・システムに root ユーザーとしてログインしていない場合は、次のコマンドを入力して、ユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
password:
#
```

3 ハードウェア要件の確認

システムは、少なくとも次のハードウェア要件を満たしている必要があります。

- 512MB の物理的な RAM
- 次の表に、使用可能な RAM に関するスワップ領域要件を示します。

使用可能な RAM	必要なスワップ領域
最大 256MB	RAM のサイズの 3 倍
257 ～ 512MB	RAM のサイズの 2 倍
513 ～ 726MB	RAM のサイズの 1.5 倍
727MB 以上	RAM のサイズの 0.75 倍

- クライアント・インストールに必要な TMP 領域の最小値は、115MB です。/tmp ディレクトリの最小ディスク領域要件は、選択したインストール・タイプによって異なります。次の表に、インストール・タイプごとの /tmp ディレクトリの最小ディスク領域要件を示します。

クライアント・インストール・タイプ	/tmp ディレクトリに必要なディスク領域 (MB)
Instant	150
管理者	850
ランタイム	470
カスタム (すべてのコンポーネントを選択した場合)	780

- Oracle ソフトウェア用の 34MB ～ 1.9GB のディスク領域 (インストール・タイプによって異なる)

システムがこれらの要件を満たしていることを確認するには、次の手順を実行します。

1. 物理的な RAM のサイズを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/prtconf | grep "Memory size"
```

システムにインストールされている物理的な RAM のサイズが必要サイズより小さい場合は、追加のメモリーをインストールしてから続行してください。

2. 構成されているスワップ領域のサイズを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/swap -s
```

追加のスワップ領域の構成方法は、必要に応じてご使用のオペレーティング・システムのマニュアルを参照してください。

3. /tmp ディレクトリ内の空きディスク領域の量を調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# df -k /tmp
# df -h /tmp (on Solaris 10)
```

/tmp ディレクトリで使用できるディスク領域が 400MB 未満の場合は、次の手順の 1 つを実行します。

- /tmp ディレクトリから不要なファイルを削除します。

- oracle ユーザーの環境を設定する場合（後述します）は、TEMP および TMPDIR 環境変数を設定します。
 - /tmp ディレクトリを含むファイル・システムを拡張します。ファイル・システムの拡張方法は、必要に応じてシステム管理者に確認してください。
4. システムで利用できる空きディスク領域の量を調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# df -k
# df -h (on Solaris 10)
```

5. システム・アーキテクチャがソフトウェアを実行できるかどうかを判断するには、次のコマンドを入力します。

```
# /bin/isainfo -kv
```

次に、このコマンドの予想される出力を示します。

```
64-bit sparcv9 kernel modules
```

予想していた出力が表示されない場合、このシステムにソフトウェアをインストールすることはできません。

4 ソフトウェア要件の確認

システムは、少なくとも次のソフトウェア要件を満たしている必要があります。

- オペレーティング・システムのバージョンは、Solaris 8 Update 7 以上、Solaris 9 update 6 以上、または Solaris 10 である必要があります。
- 次のパッケージ（またはそれ以上のバージョン）がインストールされている必要があります。

```
SUNWarc
SUNWbtool
SUNWhea
SUNWlibm
SUNWlibms
SUNWsprot
SUNWtoo
SUNWilof
SUNWilcs
SUNWi15cs
SUNWxfnt
SUNWsprox
```

注意： ロケールによっては、Java 用の追加のフォント・パッケージが必要な場合があります。詳細は、次の Web サイトを参照してください。

<http://java.sun.com/j2se/1.4.2/font-requirements.html>

- PL/SQL のネイティブ・コンパイル
次のうちのいずれか 1 つが必要です。
 - Sun ONE Studio 8 (C および C++ 5.5)
 - gcc 3.4.2
- Pro*C/C++, Oracle Call Interface、Oracle C++ Call Interface および Oracle XML Developer's Kit (XDK)
Sun ONE Studio 8 (C および C++ 5.5)

- Pro*COBOL

Micro Focus Server Express 2.2 (Solaris 8 のみ)

SP1 に対応した Micro Focus Server Express 4.0 以上

Acucorp AcuCobol v6.1

- Pro*FORTRAN

Sun ONE Studio 8 (FORTRAN 95)

- Oracle JDBC/OCI ドライバ

Oracle JDBC/OCI では、次の JDK バージョンを使用できます。

ただし、インストールには必要ありません。

- Sun Java 2 SDK Standard Edition 1.2.2_14 および JNDI 拡張形式
- Sun Java 2 SDK Standard Edition 1.3.1_09 および JNDI 拡張形式
- JNDI 拡張形式に対応した 32 ビットおよび 64 ビットの Sun Java 2 SDK Standard Edition 1.4.2-b05 以上

JDK 1.4.2 はこのリリースとともにインストールされます。

システムがこれらの要件を満たしていることを確認するには、次の手順を実行します。

1. インストールされている Solaris のバージョンを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# uname -r
```

```
5.9
```

この例では、表示されるバージョンは Solaris 9 (5.9) です。オペレーティング・システムのアップグレードの詳細は、必要に応じてオペレーティング・システムのマニュアルを参照してください。

2. 必要なパッケージがインストールされているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# pkginfo -i SUNWarc SUNWbtool SUNWhea SUNWlibm \ SUNWlibms SUNWsprot  
SUNWsprox SUNWtoo SUNWilof \  
SUNWilcs SUNWi15cs SUNWxfnt
```

パッケージがインストールされていないか、バージョンが要件よりも低い場合は、インストールします。

また、システムに次のパッチがインストールされていることも確認する必要があります。リストに続く手順では、これらの要件を確認する方法について説明します。

注意： リストに記載されているよりも新しいバージョンのパッチがシステムにインストールされている場合もあります。リストに記載されているパッチがインストールされていない場合は、リストに記載されているバージョンをインストールする前に、最新のバージョンがインストールされているかどうかを調べてください。

- Solaris 8 でのすべてのインストールには、J2SE Patch Cluster for Solaris 8 に含まれているすべてのパッチが必要です。
 - 108528-23, SunOS 5.8: kernel update patch
 - 108652-66, X11 6.4.1: Xsun patch
 - 108773-18, SunOS 5.8: IIIM and X I/O Method patch
 - 108921-16, CDE 1.4: dtwm patch
 - 108940-53, Motif 1.2.7 and 2.1.1: Runtime lib. patch for Solaris 8
 - 108987-13, SunOS 5.8: Patch for patchadd and patchrm
 - 108989-02, /usr/kernel/sys/acctctl & /.../exaccts patch
 - 108993-45, SunOS 5.8: LDAP2 client, libc, libthread and libnsl libraries patch
 - 109147-24, SunOS 5.8: linker patch
 - 110386-03, SunOS 5.8: RBAC Feature Patch
 - 111023-02, SunOS 5.8: /kernel/fs/mntfs and ... sparcv9/mntfs
 - 111111-03, SunOS 5.8: /usr/bin/nawk patch
 - 111308-03, SunOS 5.8: /usr/lib/libmtmalloc.so.1 patch
 - 111310-01, SunOS 5.8: /usr/lib/libdhcagent.so.1 patch
 - 112396-02, SunOS 5.8: /usr/bin/fgrep patch

追加パッチ:

- 111721-04, SunOS 5.8: Math Library (libm) patch
- 112003-03, SunOS 5.8: Unable to load fontset ... iso-1 or iso-15
- 112138-01, SunOS 5.8: usr/bin/domainname patch
- Solaris 9 でのすべてのインストールには、次のパッチが必要です。
 - 112233-11, SunOS 5.9: Kernel Patch
 - 111722-04, SunOS 5.9: Math Library (libm) patch

Numa Systems には次の追加パッチが必要です。

- 115675-01, SunOS 5.9: liblgrp API
- 113471-08, SunOS 5.9: Miscellaneous SunOS Commands Patch
- 115675-01, SunOS 5.9: /usr/lib/liblgrp.so Patch
- PL/SQL ネイティブ・コンパイル、Pro*C/C++、Pro*FORTRAN、Oracle Call Interface、Oracle C++ Call Interface および Oracle XML Developer's Kit (XDK) には、Solaris 8 および Solaris 9 の次のパッチが必要です。

112760-05, C 5.5: Patch for S1S8CC C compiler

オペレーティング・システムのパッチがインストールされているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/patchadd -p | grep patch_number
```

オペレーティング・システムのパッチがインストールされていない場合は、次の Web サイトからダウンロードしてインストールします。

<http://sunsolve.sun.com>

5 必須のオペレーティング・システム・グループおよびユーザーの作成

Oracle Database をインストールする場合は、次のローカル・オペレーティング・システムのグループおよびユーザーが必要です。

- Oracle インベントリ・グループ (oinstall)
- Oracle ソフトウェア所有者 (oracle)

これらのグループおよびユーザーがすでに存在しているかどうかを調べる場合、または必要に応じて作成する場合は、次の手順を実行します。

1. oinstall グループが存在しているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# more /var/opt/oracle/oraInst.loc
```

このコマンドの出力結果が oinstall グループ名を示している場合、そのグループはすでに存在しています。

oraInst.loc ファイルが存在する場合、このコマンドの出力結果は次のようになります。

```
inventory_loc=/u01/app/oracle/oraInventory
inst_group=oinstall
```

inst_group パラメータは、Oracle インベントリ・グループの名前 oinstall を示しています。

2. 必要に応じて次のコマンドを入力し、oinstall グループを作成します。

```
# /usr/sbin/groupadd oinstall
```

3. oracle ユーザーが存在し、正しいグループに属しているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# id -a oracle
```

oracle ユーザーが存在する場合は、このコマンドにより、ユーザーが属しているグループに関する情報が表示されます。出力結果は次のようになります。oinstall がプライマリ・グループであり、dba がセカンダリ・グループであることが示されています。

```
uid=440(oracle) gid=200(oinstall) groups=201(dba),202(oper)
```

4. 必要に応じて、次の処理の 1 つを実行します。

- oracle ユーザーが存在していても、そのプライマリ・グループが oinstall ではないか、そのユーザーが dba グループのメンバーでない場合は、次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/usermod -g oinstall -G dba oracle
```

- oracle ユーザーが存在しない場合は、次のコマンドを入力して作成します。

```
# /usr/sbin/useradd -g oinstall [-G dba] oracle
```

このコマンドにより oracle ユーザーが作成され、プライマリ・グループとして oinstall、オプションのセカンダリ・グループとして dba が指定されます。

5. 次のコマンドを入力して、oracle ユーザーのパスワードを設定します。

```
# passwd -r files oracle
```

6 Oracle ベース・ディレクトリの作成

次のような名前の Oracle ベース・ディレクトリを作成して、適切な所有者、グループおよび許可を指定します。

```
/u01/app/oracle
```

Optimal Flexible Architecture (OFA) ガイドラインでは、Oracle ベース・ディレクトリに次のようなパスを使用することを薦めています。

```
/mount_point/app/oracle_sw_owner
```

このディレクトリを作成する場所を調べるには、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを入力して、マウントされているすべてのファイル・システムに関する情報を表示します。

```
# df -k
```

このコマンドにより、システムにマウントされているすべてのファイル・システムに関する情報が表示されます。次のような情報があります。

- 物理デバイス名
 - ディスク領域の合計量、使用量および使用可能な量 (KB)
 - そのファイル・システムのマウント・ポイント
2. 表示される出力から、次の要件を満たすファイル・システムを 1 つまたは 2 つ特定します。
 - 1.2GB 以上の空きディスク領域のある単一ファイル・システム
 - 合計で 1.2GB 以上の空きディスク領域のある複数のファイル・システム
 3. 特定した各ファイル・システムのマウント・ポイント・ディレクトリ名を書き留めます。

必要なディレクトリを作成して、適切な所有者、グループおよび許可を指定するには、次の手順を実行します。

注意： 次の手順で、/u01 および /u02 を手順 3 で特定した適切なマウント・ポイント・ディレクトリに置き換えます。

1. 次のコマンドを入力して、Oracle ベース・ディレクトリに対して特定したマウント・ポイント・ディレクトリのサブディレクトリを作成します。

```
# mkdir -p /u01/app/oracle
```

2. 作成したディレクトリの所有者およびグループを oracle ユーザーおよび oinstall グループに変更します。

```
# chown -R oracle:oinstall /u01/app/oracle
```

3. 作成したディレクトリの許可を 775 に変更します。

```
# chmod -R 775 /u01/app/oracle
```

後でインストール中に oracle ユーザーの環境を構成するときに、作成した Oracle ベース・ディレクトリを指定するように ORACLE_BASE 環境変数を設定します。

7 oracle ユーザーの環境の構成

Oracle Universal Installer は、oracle アカウントから実行します。ただし、Oracle Universal Installer を起動する前に、oracle ユーザーの環境を構成する必要があります。環境を構成するには、次の設定が必要です。

- シェル起動ファイルで、デフォルトのファイル・モード作成マスク (umask) を 022 に設定します。
- DISPLAY 環境変数を設定します。

oracle ユーザーの環境を設定するには、次の手順を実行します。

1. 新しいターミナル・セッションを開始します。
2. X Window アプリケーションがこのシステムで表示できることを確認するために、次のコマンドを入力します。

```
$ xhost fully_qualified_remote_host_name
```

3. 次の手順の 1 つを実行します。

- ターミナル・セッションがソフトウェアのインストール先のシステムに接続されていない場合は、そのシステムに oracle ユーザーとしてログインします。
- ターミナル・セッションがソフトウェアのインストール先のシステムに接続されている場合は、ユーザーを oracle に切り替えます。

```
$ su - oracle
```

4. oracle ユーザーのデフォルトのシェルを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
$ echo $SHELL
```

5. oracle ユーザーのシェル起動ファイルをテキスト・エディタで開きます。

- C シェル (csh または tcsh) :

```
% vi .login
```

6. シェル起動ファイルで次の行を入力または編集して、デフォルトのファイル・モード作成マスクに値 022 を指定します。

```
umask 022
```

7. ORACLE_SID、ORACLE_HOME または ORACLE_BASE 環境変数がファイルで設定されている場合は、ファイルから該当する行を削除します。

8. ファイルを保存して、エディタを終了します。

9. シェルの起動スクリプトを実行するには、次のコマンドを入力します。

- Bourne シェル、Bash シェルまたは Korn シェル:

```
$ . ~/.bash_profile
```

- C シェル:

```
% source ~/.login
```

10. ソフトウェアのインストール先がローカル・システムではない場合は、ローカル・システムに表示するために、次のようなコマンドを入力して、Xアプリケーションに指示します。

■ Bourne、Bash または Korn シェル：

```
$ DISPLAY=local_host:0.0 ; export DISPLAY
```

■ C シェル：

```
% setenv DISPLAY local_host:0.0
```

この例で `local_host` は、Oracle Universal Installer の表示に使用するシステム (ワークステーションまたは PC) のホスト名または IP アドレスです。

11. ハードウェア要件の確認時に、`/tmp` ディレクトリに十分な空きディスク領域がないと判断した場合は、次のコマンドを入力して `TMP` および `TMPDIR` 環境変数を設定します。十分な空きディスク領域があるファイル・システム上のディレクトリを指定します。

■ Bourne、Bash または Korn シェル：

```
$ TMP=/directory
$ TMPDIR=/directory
$ export TMP TMPDIR
```

■ C シェル：

```
% setenv TMP /directory
% setenv TMPDIR /directory
```

12. 次のコマンドを入力して、`ORACLE_BASE` 環境変数を設定します。

■ Bourne、Bash または Korn シェル：

```
$ ORACLE_BASE=/u01/app/oracle
$ export ORACLE_BASE
```

■ C シェル：

```
% setenv ORACLE_BASE /u01/app/oracle
```

前述の例では、`/u01/app/oracle` は以前に作成した Oracle ベース・ディレクトリです。

13. `ORACLE_HOME` および `TNS_ADMIN` 環境変数が設定されていないことを確認するために、次のコマンドを入力します。

■ Bourne、Bash または Korn シェル：

```
$ unset ORACLE_HOME
$ unset TNS_ADMIN
```

■ C シェル：

```
% unsetenv ORACLE_HOME
% unsetenv TNS_ADMIN
```

14. 環境が正しく設定されたことを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
$ umask
$ env | more
```

`umask` コマンドにより値 22、022 または 0022 が表示されていること、およびこの項で設定した環境変数に適切な値が設定されていることを確認します。

8 製品ディスクのマウント

ほとんどの Solaris システムでは、製品ディスクをドライブに挿入すると自動的にマウントされます。ディスクが自動的にマウントされない場合は、次の手順を実行してマウントします。

1. ユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
```

2. 必要に応じて、次のようなコマンドを入力して現在マウントされているディスクを取り出し、ドライブから取り除きます。

```
# eject
```

3. ディスクをディスク・ドライブに挿入します。

4. ディスクが自動的にマウントされたことを確認するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# ls /dvd/dvd0
```

5. このコマンドによってディスクの内容が表示されない場合、次のようなコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/mount -r -F hsfs /dev/dsk/cxydzs2 /dvd
```

この例では、/dvd はディスク・マウント・ポイント・ディレクトリ、
/dev/dsk/cxydzs2 はディスク・デバイスのデバイス名です。たとえば、
/dev/dsk/c0t6d0s2 のようになります。

6. Oracle Universal Installer で「ディスクの場所」ダイアログ・ボックスが表示されたら、ディスク・マウント・ポイント・ディレクトリ・パスを入力します。

例：

- 自動的にマウントされるディスク：

```
/dvd/dvd0
```

- 手動でマウントされるディスク：

```
/dvd
```

9 Oracle Database Client のインストール

oracle ユーザーの環境を構成した後、次のようにして Oracle Universal Installer を起動し、Oracle Database をインストールします。

1. Oracle Universal Installer を起動するには、インストール・ファイルの場所に応じて次のコマンドを入力します。

- インストール・ファイルがディスク上にある場合は、次のコマンドを入力します。directory_path は、DVD 上の db ディレクトリのパスです。

```
$ cd /tmp  
$ /directory_path/runInstaller
```

- インストール・ファイルがハード・ディスク上にある場合は、ディレクトリを db に変更して、次のコマンドを入力します。

```
$ ./runInstaller
```

Oracle Universal Installer が起動しない場合、『Oracle Database Client インストレーション・ガイド for Solaris Operating System (SPARC 64-bit)』で、X Window の表示のトラブルシューティングに関する情報を参照してください。

2. 次の表に、Oracle Universal Installer の各画面での推奨するアクションを説明します。次のガイドラインを使用して、インストールを完了します。

- より詳細な情報が必要な場合、またはデフォルト以外のオプションを選択する場合、「ヘルプ」をクリックすると追加情報が表示されます。
- ソフトウェアのインストール時またはリンク時にエラーが発生した場合、『Oracle Database Client インストール・ガイド for Solaris Operating System (SPARC 64-bit)』のトラブルシューティングに関する情報を参照してください。

注意： 前述のタスクを完了している場合、ほとんどの画面でデフォルトを選択してインストールを完了できます。

画面	推奨するアクション
インストール方法の選択	デフォルトでは「基本インストール」オプションが選択されています。 Oracle ホームのディレクトリ・パスを指定します。UNIX DBA グループ oinstall が選択されていることを確認します。初期データベースを作成する場合は、名前およびパスワードを指定します。「次へ」をクリックします。
インベントリ・ディレクトリと資格証明の指定	この画面は、システムに Oracle 製品を初めてインストールする場合のみ表示されます。 Oracle インベントリ・ディレクトリのフルパスを指定します。選択されているオペレーティング・システム・グループが oinstall であることを確認します。「次へ」をクリックします。
製品固有の前提条件のチェック	前提条件の確認がすべて成功したかどうかを確認してから、「次へ」をクリックします。 Oracle Universal Installer は、システムが Oracle ソフトウェアを実行するように正しく構成されているかどうかを確認します。このマニュアルに記載されているインストール前の手順をすべて実行した場合は、すべての確認が成功します。 確認に失敗した場合は、画面に表示された失敗の原因を確認してください。可能であれば、問題を修正して確認を再実行します。システムが要件を満たしていることを確認した場合は、失敗した確認のチェック・ボックスを選択して、要件を手動で確認することもできます。
サマリー	この画面に表示された情報を確認して、「インストール」をクリックします。
インストール	この画面では、製品のインストール中、ステータス情報が表示されます。
コンフィギュレーション・アシスタント	この画面には、ソフトウェアを構成し、データベースを作成するコンフィギュレーション・アシスタントのステータス情報が表示されます。このプロセスの終了時にメッセージが表示された場合は、「OK」をクリックして続行します。
構成スクリプトの実行	プロンプトが表示されたら、指示を読み、この画面に表示されたスクリプトを実行します。「OK」をクリックして継続します。

画面	推奨するアクション
インストールの終了	コンフィギュレーション・アシスタントにより、Oracle Enterprise Manager Database Control を含む複数の Web ベースのアプリケーションが構成されます。この画面には、これらのアプリケーションに対して設定されている URL が表示されます。使用した URL を書き留めます。これらの URL で使用したポート番号は、次のファイルにも記録されます。 <pre>oracle_home/install/portlist.ini</pre> Oracle Universal Installer を終了するには、「終了」をクリックし、次に「はい」をクリックします。

10 インストール後の作業

Oracle Database のこのリリースについて理解するには、次のタスクを実行することをお勧めします。

- Web ブラウザから Oracle Enterprise Manager Database Control にログインします。

Oracle Enterprise Manager Database Control は、単一の Oracle Database インストールの管理に使用できる Web ベースのアプリケーションです。Database Control のデフォルトの URL は、次のようになります。

```
http://host.domain:1158/em/
```

ログインするには、ユーザー名 SYS を使用して SYSDBA として接続します。Oracle Database 10g のインストール時にこのユーザーに対して指定したパスワードを使用します。

- 必須およびオプションのインストール後のタスクに関する情報は、『Oracle Database インストレーション・ガイド for Solaris Operating System (SPARC 64-bit)』を参照してください（使用する製品によって異なります）。
- Database Control を使用してインストール済データベースの構成を確認する方法は、『Oracle Database インストレーション・ガイド for Solaris Operating System (SPARC 64-bit)』を参照してください。
- Oracle Enterprise Manager Database Control を使用してデータベースを管理する方法の詳細は、『Oracle Database 2 日でデータベース管理者』参照してください。

このマニュアルは、新しい Oracle DBA を対象としており、Database Control を使用して Oracle Database インストールのあらゆる面を管理する方法を説明しています。また、インストール時に構成しなかった電子メール通知および自動バックアップを有効化する方法も説明しています。

11 追加情報

この項では、次の内容について説明します。

- [製品のライセンス](#)
- [Oracle サポート・サービスへのお問合せ](#)
- [製品マニュアルの入手方法](#)

製品のライセンス

このメディア・パックに含まれている製品は、トライアル・ライセンス契約に基づき、30 日間、インストールおよび評価できます。ただし、30 日間の評価期間後もいずれかの製品の使用を継続する場合、プログラム・ライセンスをご購入いただく必要があります。

Oracle サポート・サービスへのお問合せ

Oracle 製品サポートをご購入いただいた場合、Oracle サポート・サービスに、年中無休で 24 時間いつでも、お問い合わせいただけます。Oracle 製品サポートの購入方法、または Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、Oracle サポート・サービスの Web サイトを参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

製品マニュアルの入手方法

Oracle 製品のマニュアルは、HTML および Adobe 社 PDF 形式で提供されており、入手方法がいくつかあります。

- メディア・パック内のディスク：
 - プラットフォーム固有のマニュアルは、製品ディスクに含まれています。マニュアルにアクセスするには、CD-ROM のトップレベル・ディレクトリにある `welcome.htm` ファイルを参照してください。
- Oracle Technology Network Japan の Web サイト：

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

PDF ドキュメントを表示するには、必要に応じて、Adobe 社の Web サイトから、無料の Adobe Acrobat Reader をダウンロードしてください。

<http://www.adobe.com/>

12 ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし一部のスクリーン・リーダーは括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

Oracle サポート・サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート・サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800)446-2398 にお電話ください。

13 サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

Oracle Database Client クイック・インストール・ガイド, 10g リリース 2 (10.2) for Solaris Operating System (SPARC 64-bit)

部品番号 : B25028-03

原本名 : Oracle Database Client Quick Installation Guide, 10g Release 2 (10.2) for Solaris Operating System (SPARC 64-Bit)

原本部品番号 : B15693-02

Copyright © 2006, Oracle.All rights reserved.

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software—Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかえる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万が一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Retek は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

ドラフトのアルファ版およびベータ版ドキュメントはプレリリース状態のもので、これらのドキュメントは、デモおよび暫定使用のみを目的としたものです。タイプミスやデータの不正確さなど、いくつかの誤りが存在することがあります。このドキュメントは予告なく変更する場合がありますが、当ソフトウェアを使用するハードウェアに限定するものではありません。オラクル社はプレリリースのドキュメントに対して、いかなる目的や方法においても保証しません。またこのドキュメントを使用したことによって損失、費用および損害が発生した場合も一切責任を負いかねますのでご了承ください。

